北海道新聞　令和2年2月16日（朝刊・小樽後志版/15面）

第22回 雪あかりの路

キャンドル作り楽しく

樽商大生企画のゲーム盛況

16日に最終日を迎える「第22回小樽雪あかりの路」（実行委主催）は期間中2度目の週末を迎えた15日、小樽運河や旧手宮線などのメイン会場以外の市内の市場や商店街でも、キャンドル製作体験や大学生が企画したゲームなどのイベントが行われ、市民や観光客でにぎわった。（徳留弥生）

中央市場で行われたキャンドル製作体験。好きな色を選んで作る子ども

中央市場第3棟「ガンガンギャラリー」（稲穂3）では、市内のろうそく製造「フジ本芳川商会」がキャンドル製作体験の場を設けた。キャンドル作家の金田千鶴さん(51)＝小樽市＝が作り方を指導。訪れた親子連れらは、赤や青、黄色などの1、2センチ角の立方体のろうを選んで紙コップに詰め、液状のろうを流し込んで冷やしキャンドルを完成させた。市内の幼稚園児小西葵ちゃん(4)は「好きな色をたくさん使って作りました」と喜んでいた。

小樽都通り商店街（稲穂2）では、小樽商大の学生サークル「小樽笑店」がゲームイベントを企画。スノーキャンドル風のオブジェを並べた会場で、9枚の的をボールで射貫く「ストラックアウト」を行い、観光客らが次々に挑戦した。

投げる球は例年、雪玉を使うが今年は少雪とここ数日の暖気の影響もありゴムボールを利用。横浜市の会社員星野美貴さん(26)は「的に当てるのは難しかったが楽しい。小樽運河会場も楽しみたい」と話した。

小樽雪あかりの路は最終日の16日も午後5時～9時まで市内各地でろうそくを灯す。

スノーキャンドル風のオブジェを飾った小樽都通り商店街の一角でゲームを楽しむ子ども

北海道新聞　令和2年2月16日（朝刊・小樽後志版/15面）

オルゴール堂との縁紹介

沼田でフォーラム　きょう小樽でも

炭鉄港

日本遺産に

【沼田】日本遺産「炭鉄港」の認定記念フォーラム（炭鉄港推進協議会主催）が15日、空知管内沼田町のほろしん温泉で開かれた。道内外の専門家3人が日本遺産の意義や小樽と空知のつながりなどを語り、約100人が耳を傾けた。

小樽商科大の高野宏康学術研究員は、小樽オルゴール堂の建物が沼田町の開拓の祖、沼田喜三郎が設立した会社だったと紹介。小樽にとっての炭鉄港の意義について「ばらばらだった港湾遺産や鉄道遺産が炭鉄港の『ストーリー』を通じてつながった」と強調した。

NPO法人炭鉱（ヤマ）の記憶推進事業団の吉岡宏高理事長は、沼田町にある構成文化財「クラウス15号蒸気機関車」を取り上げ、クラウスと炭鉱や鉄道の遺構を結びつけて新たな物語を紡いだり、日本海沿岸の旧炭鉱と組み合わせたりして発信することを提案した。

小樽市民センター（色内2）でも16日午後3時半から、同フォーラムが開かれる。無料。（星野真）

日本遺産「炭鉄港」が地域にもたらすプラス効果や可能性を語る参加者たち

北海道新聞　令和2年2月17日（朝刊・小樽後志版/15面）

「小樽は文化財生かすマチ」

認定記念フォーラム　駒木さんら講演

炭鉄港
日本遺産に

日本遺産「炭鉄港」の認定記念フォーラム（炭鉄港推進協議会主催）が16日、小樽市民センター・マリンホール（色内2）で開かれ、文化財を観光やまちづくりに生かす方法を考えた。

約200人が来場した。北海道職業能力開発大学校（銭函3）の駒木定正特別顧問は、旧国鉄手宮線跡が小樽雪あかりの路のメイン会場になっている例を挙げ「小樽市民は20年以上前から文化財を生かしたまちづくりに取り組んできた」と強調。「今後は他の自治体の文化遺産とつなぐような活動が必要」と述べた。

2017年に生野鉱山などが日本遺産に認定された兵庫県朝来市総合政策課の和田幸司副課長は「歴史や文化を発信するガイドの高齢化が課題。2年前から高校生を対象に日本遺産の活用を考えるフォーラムを開いている」と話した。

NPO法人炭鉱（ヤマ）の記憶推進事業団（岩見沢）の吉岡宏高理事長と小樽商科大の高野宏康学術研究員、駒木さんと和田さんの4人によるパネル討論も行われた。

炭鉄港は空知の炭鉱、室蘭の鉄鋼、小樽の港と各地をつなぐ鉄道からなる産業遺産。昨年5月に小樽を含む12市町が日本遺産に認定された。（渡辺佐保子）

文化遺産の広域連携の必要性やガイドの育成について話し合ったフォーラム

北海道新聞　令和2年2月17日（朝刊・小樽後志版/15面）

第22回 雪あかりの路

冬の小樽をろうそくの火で彩る第22回小樽雪あかりの路（実行委主催）は16日、8日間の日程を終え閉幕した。この日は準メイン会場の小樽芸術村でアカペラコンサートが行われ、観客は光と歌声が織りなす芸術に酔った。今回の雪あかりは少雪や暖気に悩まされ、新型コロナウイルス感染拡大の影響で来場者数も減ったが、観光客らは最終日も幻想的な街並みの雰囲気を楽しんだ。（渡辺佐保子）

光と歌声 幻想的

新型肺炎で来場減も… 観客ら楽しみ閉幕

アカペラの歌が響き、幻想的な雰囲気に包まれた小樽芸術村会場

アカペラコンサートには小樽商大の「AIRS（エアーズ）」など16組が出演し、宇多田ヒカルさんの「オートマチック」や安全地帯の「ワインレッドの心」といった親しみやすい曲を披露。観客は手拍子で盛り上がり、曲が終わるたびに大きな拍手を送った。

今年は日韓関係の悪化で韓国人ボランティア団体「OKOVO（オコボ）」の参加者が例年の半数にとどまり、記録的な雪不足や暖気といった逆風にも見舞われた。新型ウイルスの影響で、来場者数は前年より3割ほど減る見通しだ。

実行委の近藤修弘検討委員長は「とても苦労したが、新型ウイルス以外は『災い転じて福となす』との言葉が当てはまる」という。ボランティアには台湾の団体「友好（ヨーハオ）」が初めて加わり、小樽商科大生も例年以上に多く参加した。少雪や暖気は「運営スタッフから『もっとガラスを活用しよう』との案も生まれ、今後の暖冬対応を考える機会になった」と振り返った。